

## 編集者のことば

矢 野 暢\*

この『東南アジア研究』は、この号に始まりこれからは、1年に3回は特集号として編集されることになった。毎号なにか特定のテーマが選ばれ、それに見合った内容の論文が数篇集められ、そして、ひとりの編集責任者によって体系的な構成を与えられることになる。私個人としては、この雑誌のそのような方向への性格変更は大賛成である。

ところが、たまたま、私が、この最初の号の編集責任の大役を引き受けることになってしまった。下手な編集をして妙な先例を作ってはいけないと思い、かなり苦心した。その結果、なんとかできあがったのがこの号である。

私個人がここ数年取り組んでいる二、三の研究課題の中から、「近代日本の南方関与」というテーマを選んでみたが、それには理由がないわけではなかった。なによりも、このテーマは、学会ではこれまであまりにも無視されてきている。近代日本と中国大陸あるいは朝鮮半島との関わりについては、「アジア主義」という精神的な問題とのからみもあって、かなりの検討がなされてきてはいるが、こと東南アジアとの関係ということになると、太平洋戦争関係のごく限定的な局面を除けば、ほとんど無視され続けてきた。そういう不毛な状況での問題提起は、それなりに意味があることのように思えたのである。

5人の専門家に執筆のお願いをしたところ、みな快く引き受けてくださった。そして、いい作品が届けられた。いずれもパイオニア的な新鮮な問題提起であって、学界にたいする貴重な貢献であると思う。

原誠氏の三浦襄についての長大な論文は、同志社大学神学部大学院に提出された修士論文である。修士論文の水準をはるかに抜いたすぐれた論考であるが、終戦と同時にバリ島で自殺を遂げた三浦襄という注目すべき日本人についての緻密な掘り下げがなされている。

吉川利治氏の「アジア主義」者のタイ国進出に関する論文は、ある意味では注目すべき問題提起である。つまり、従来「アジア主義」はもっぱら中国ないし朝鮮半島とだけ結びつけて論じられてきたわけだが、その舞台を明治期の南洋にまで引き伸ばしてもいいのではないか、というユニークな問掛けがここではなされている。

巻頭の私の論文は、従来まったく無視されてきた大正時代の「南進論」の認知を呼びかけ、不毛に墮しがちな大正期研究に一石を投ずる問題提起である。

資料の欄には、外務省外交史料館所蔵の東南アジア関係史料を詳細に調べあげた土屋健治氏の貴重な労作、戦時南方施政についてのこれまでの一連のお仕事につながる太田弘毅氏の実証的な論考、そして最後にひじょうに貴重な一次資料である石居太楼氏の半生記を、それぞれ掲げた。このどれもが学界にたいするかけがえのない貢献であることは保証できる。

この特集がきっかけとなって、近代日本の南方関与にたいする学界の取組が、今後もっと活発になってほしいものである。

\* 京都大学東南アジア研究センター

## Editor's Note

Toru YANO\*

Japan's presence in Southeast Asia has become a matter of wide concern today, and in the academic world, too, keen attention is now being paid to the question of Japan's relations with Southeast Asia in the period after the Meiji Restoration. This line of study had long remained taboo to scholars after the defeat of Japan in Southeast Asia in the Pacific War, but it has now become popular among the younger generation of students.

This special issue, wholly dedicated to historical aspects of Japan's presence in Southeast Asia, is a collective effort by scholars to challenge the taboo and open new frontiers in scholarship on Southeast Asia in Japan. It is a collection of six essays by six different authors, on the subject of "Historical Patterns of the Commitment to Southeast Asia of Modern Japan".

Toru Yano's article on trends of the "Nanshin" (Advance to the South) movement in the Taisho period is a unique discussion on the subject which has so far been neglected by scholars, who tend to believe that the "Nanshin" movement was not overtly present in the Taisho period.

Makoto Hara's lengthy article, his Master's thesis submitted to Doshisha University, is a penetrating treatment of the life of a Japanese named Jo Miura, who lived for many years in Indonesia and committed suicide immediately after the end of World War II.

Toshiharu Yoshikawa's discussion on the group of "Pan-Asianist" Japanese who went to Siam in the mid-Meiji period touches upon a very interesting question; namely, whether or not the sphere of activities of those "Pan-Asianists" even reached Southeast Asia expanding beyond China.

The three other papers provide good source material for studies related to the Japan's relations with Southeast Asia.

Kenji Tsuchiya introduces the diplomatic documents available in the archives of the Ministry of Foreign Affairs, Tokyo, which deal with Japan's diplomatic activities in the pre-World War II period.

Kohki Ohta clarifies some aspects of Japanese military administration in Southeast Asia during World War II.

Finally, Taro Ishii provides first-hand material on his life history, which reveals how a Japanese merchant lived in Java for many years, from 1916.

The Editor hopes that these articles will help promote interest in this subject in academic circles, both within and outside Japan.

---

\* The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University